



どうしてそう思うの？

九十五歳で他界した母は、八十六歳を越える頃から記憶が次第に怪しくなり始めた。特に日常の記憶に関するのと、いわゆる認知症検査の質問項目にある、朝食に何を食べたか、先程来た人は誰か、今日は何月何日かなどの記憶である。しかし、もつと根本的なこと、例えばどんな時しあわせだと思つか、良い人とはどんな人を言うのか、死ぬとどうなると思うか、などの話題では最後まで普通に会話ができた。そのことに気付くきっかけとなったのは、母が九十二歳の時であった。ある朝いつものように母のベッドの傍に行き、

「お母さん、おはよう」と言うと、

「あん様は私の母親に当たる方ですか」と妙に改まった口調で尋ねたのだ。何をバカなことをと思いつつも、内心とうとう来たかと焦った。心の動

揺を悟られまいと、とっさに、

「どうしてそう思うの？」と聞き返していた。

「あんさんがいつも私の世話をしてくれるものですから……。しみじみ考えてみましたが、こんなにしてくれるのは母親の他にないと思つたものから」

苦し紛れに口にした質問に対する母の返事は思いもよらぬ言葉だった。しばらく絶句し、そして涙が零れた。

もしあの時、

「九十二歳の娘の母親がこんなに若いはずないでしょ」

と声を荒げれば、母は黙ってしまい、先程の言葉も母の口から語られることはなかっただろう。

とんでもないことを言っているようでも、何かしらの思考回路があつて、それなりの理由のあることを、その時初めて知つた。

考えてみれば今日が何月何日かなど、母にとつて覚えておく価値もない、どうでもよい事であつたのだ。これから食べるご飯ならともかく、もう食べてしまった過去の食事のことなど何の興味も持てないことだったのだ。

ある時、母に聞いてみた。

「お母さんは、いつも『今が一番幸せ』って言うけど幸せってどういうことなんだろうね」

「そうねえ、毎日のご飯がおいしいってことじゃないかね」

なるほど食いしん坊の母らしい答えだ。さらに、

「じゃあ、毎日のご飯がおいしいとどうして幸せなの？」

と聞くと、

「そりゃあもちろん、あなたがおいしいもの作ってくれるからでしょ。それに健康だと何食べてもおいしいのよ。気楽に暮らさせてもらってるからね。本当に幸せだねえ。前世でよほど善いことしたのね、私」

多少辻褄の合わないところもあるが、結局母の言わんとしたことは、毎日ご飯をおいしく食べられるということ、第一に作ってくれる人がいること、第二に健康に恵まれていること、第三に心に悩みがないこと。そしてそれらどれ一つ欠けても叶わぬわけで、本当にありがたく幸せなことなのだというのだった。そう考えてみると、かなり深い意味を持つ言葉であつた。

今になって悔やんでも、もう遅いのだが、認知症による妄想と決めつけ、

バカなことをと一蹴する前にひと言、「どうしてそう思うの？」とまったくもって聞いてみるべきだった。宝の山のような言葉の数々を聞かず仕舞いにしました。(浅田みどり)

### カメを飼う

だれでも知っている童謡に「兎と亀」がある。作者は石原和三郎である。石原和三郎には、他に「金太郎」「さるかに」「花咲爺」「舌切雀」などの童謡がある。この童謡「兎と亀」が出たのは明治三十四年。このころ、童謡作家の努力により、旧弊な美文調から、親しみ易い口語調へと変わったらしい。短歌、俳句の革新はもう少し前に始まっているので、童謡の方は少し遅れたようだ。

石原和三郎の出身地は群馬県の花輪村。私の祖父はその村の寺で住職をしていた。本堂のわきに墓地があり、石原和三郎は、いま、その墓地に眠っている。そんな縁もあって、童謡「兎と亀」には特別親しみを持っている。

埼玉の小野長辰さんの歌集(『薄明宵』)、

○産卵の用意で穴を掘る亀に気づかれ

ぬやうに妻がてつだふ

という歌があった。カメが卵を産む穴を掘るのを、そっと手伝う奥様、それを見守る作者。微笑ましい光景である。夫婦して、カメが好きらしい。小野さんの生まれは昭和十三年。私より九歳年上である。その歳でカメを飼いつづけているのが羨ましい。

先日、「お父さん、カメいる」と長女から電話があった。聞くと、夫から川にでも放してこいと度々言われている職場仲間がいて、貰ってくれる人を探しているらしい。

「それなら貰うよ」と返事をした。電話があった日の午後、届いた。かなり大きく成長した亀だろうとは想像していたが、やはり大きい。測ってみると、甲長縦一七センチ、横一五センチあった。その大きさと、三年以上飼われていたようである。

種類はミドリガメ(ミシシッピアカミミガメ)。小さいうちは、甲羅が緑色をしていて、とても可愛いのが、そのうちどんどん大きくなり、金魚などを飼う水槽では飼えないほどになる。

そうなるかと持て余してしまう。そして、近くの川や池に放すことにもなる(これはイケナイことだが、その議論は措

く)。

私は、健康維持のため散歩を心がけていて、カメも小さな容器のなかだけでは、退屈で運動不足にもなるだろうと思い、毎日、朝と夕方、家の前の道路を歩かせている。過日、通りがかった老人から声をかけられた。「私も飼っていました。惜しい経験をするといつまでも記憶に残るものらしい。

その昔、私が少年の頃(いま七十一歳)、明治生れの祖父が、子供の遊び相手にカメを買ってきてくれた。石亀だったと思う。祖父は甲羅に錐で穴をあけ、そこに麻紐を通して逃げないようにつけてくれた。

祖父の、カメの甲羅に穴を開けて麻紐を通すという発想は、牛の鼻環から来ていたと思われるが、牛には有効だが、カメにはむかない。というよりダメである。亀は噛み切る力が強く、麻紐などは簡単に噛み切ってしまうからである。結局、何日かして、逃げられてしまった。

いま飼っているカメの主食はホームセンターなどで売っている餌(カメフード)。他に胡瓜が大好きで、一日に一本の二分の一くらいは平らげる。カ

メにあげるため、胡瓜は欠かせない常備品となった。(高橋 政雄)

## 白の記憶

また雪の季節が来た。

私のふるさは、みちの秋田。日本海寄りの地である。庄内平野の続きの平野とも言え、鳥海山が美しく見える。

産土は、周囲一面田んぼで、ゆるく円を描くように七つの集落があった。私の集落の円の直径、むかい側に小学校があった。友達と誘いあい、円をつつきり、小学校へ通ったものだ。

季節により、風景の色合いは変わる。春には、田んぼが一面、土の色になる。やがて、水が張られて水の色になり、雲が映る。早苗の季節には、早緑となり、夏には濃緑、秋には全面、黄金色になる。そして冬、見渡すかぎり白、まっ白になる。日本海からの風が吹き荒れ、雪が横に吹く。人々は風を恐れ、家を雪囲いでしっかり守る。

小学校三年生のときだったと思う。その日は吹雪がひどく、集団下校となった。授業が早めに切り上げられ、全校生徒が体育館に集まり、集落単位の

下校となった。円の直径を歩くいつもの登下校の道ではなく、吹雪をよけ外周にある集落を通り、下校するのだ。

私は低学年生の手をとる高学年生の背を見つつ、その後ろを歩いた。帽子は顔を守ってはくれないので、みなネツカチーフをしつかりしぱり、オーバークートのフードをかぶっていた。吹雪をよけて、顔をうずめるようにして歩いた。下を向き、ひたすら歩いた。

隣の集落を過ぎ、私の家のある集落との境に来た。そこは横なぐりの吹雪がうなる音とともに正面からも吹く。呼吸もできない。体も押しもどされそうになる。ネツカチーフやフードはぬげ、吹雪は前に行く高学年生の姿もかくす。私は、私の前に高学年生がいることを信じ、必死で歩いた。まっ白の中を、私一人がさまよう心地だ。時折、さあっと吹雪が息をつくように、前の人の姿を見せる。

三、四十分ほど歩いたろうか。集落に入り、わが家の玄関にたどり着いた。母が立っていた。「どうやって帰ってくるんだろうと思ってたよ」と言う母の心配そうな顔を見たとき、私は爆発するように泣いた。

その夜、母は綿を入れた防空頭巾

(当時はそう呼んだ)を縫って、しっかりと紐をつけてくれた。でき上がったそれをかぶったときの、防空頭巾の確かさ、温かさは、今も私の顔にある。今も胸がつまる八歳の記憶である。集団下校の、たった一度の記憶である。その後、防空頭巾をかぶったかどうか記憶にない。

当時ふるさとは、吹雪がひどくて道を失い、家の近くまで帰っていたのに、家がわからず凍死していたという悲劇がいくつもあったものだ。

冬の下校のことを姉妹に聞いてみると、集団下校を何度も経験したと言う者、経験がないと言う者、防空頭巾をかぶったと言う者、知らないと言う者、下校よりも田中を歩く登校時、風よけにされて大変だったと言う者、四人姉妹の記憶はさまざまである。六十年以上経った。

二〇一七年の夏、久しぶりにふるさとに帰った。かの集団下校の道を、車で通ってみた。小学校は既に廃校となり、姿がない。集落を通る道路は本当に狭い。そして、集落の切れめのかの地は、夏の陽を受け、静まりかえっていた。(滝口 良子)

## 詩が降りてきた

神懸かったような話だが、高校の国語の授業中、突然私は幻影を見た。目を射るように強く光が射してきたかと思うと、またたく間に明るい港の光景が、脳裡に浮かんだ。

夏の河朱き鉄鎖の端渡る 山口誓子  
引き金はこの俳句である。眼底検査の折、ガシヤッと写真を撮られたあと網膜に光の残像が張りついて容易に取れなかった。そのように俳句の言葉が即、映像になり、不思議なほどその光景は明らかで、長く記憶に残った。

ちょうどその頃だったか。所属していた文芸部で短歌の勉強をしないかと誘われた。詩について四行にするか八行がいいのか、生意気にもその表現方法に迷っていた私は、定型である短歌に心が動いた。先生は三人で、歌人然とした年長のY先生の指導のもと歌会は始まった。「甘い」とか「少女趣味的」などと言うY先生の歌評が小気味良く響き、私はたちまち短歌の虜になった。

若いT先生が、三行に書いた私の短歌ノートを見て「啄木の真似ですか。

現代短歌は一行に書き下ろします」と教えてくれた。またあるとき、その歌評とともに「僕は作品のためなら母親も殺します」とあり、文学を迫及する先生の姿勢に驚いた。前衛短歌が熱く語られ始めた頃だったと思う。

短歌の先生に出会い、卒業後も短歌を心に持ち続け、結婚前には勧められて短歌結社にも入っていた。だが結婚後ほどなく、香川の三本松から兵庫の明石市に転勤。ちよっとした興味本意で始めたブックセルスの仕事が面白くなるにつけ、反対に短歌に対する気持が薄れて欠詠するようになった私は、結局結社をやめてしまった。T先生からの年賀状には「歌をわすれたカナリアは裏の藪に捨てられる事に決まっています」とあり、この言葉は衝撃的だった。

しばらくは生活も順調だったが、子供ができないため仕事を辞めて、ある時病院に行った。すると思いがけず入院、手術となってしまった。退院後、だんだん平静を取り戻してはいったが、それからは無気力で沈鬱な日が続いた。何度となく歌のことを思い出したが、作歌の苦しみを知っていたので、再入会する気になれなかった。長く歌に触

れない日を過ごした結果、歌言葉が欠片も浮かばないようになっていた。

どのくらい月日が過ぎていただろうか。夕暮れ時だった。自宅の近くを走る列車の音に、遙かな抒情への思いが溢れてきた。車輪を軋る音が天高く響き、ひらめくように宮柊二の歌が、蘇ってきた。

つきはれし貨車ゆみかひが夕光に走りつ  
つ寂はなしきまでにとどまらずけり  
好きな歌だったが、長い間思い出すことなどなかった。なにに突然この歌が口を突いて出てきた。

歌集『群鷄』の右の歌は、「若き宮柊二が白秋のもとを去った頃、詠んだ歌と思われる」と、柏崎驍二の『宮柊二の歌三六五首』に書かれていた。

〈ああ、歌を詠みたい〉その強い衝迫にかられた私は、決意新たに再び歌の世界に戻ってきた。若い時はやたら気が多くて、歌がすべてとは言えなかったが、好きだったことは確かで、靈感のように二度も詩が降りて来るような体験をした。短歌に導かれて生きてきたと言える。一番好きな短歌が生涯の友として残り、今は満足に思っている。  
(宮西 史子)